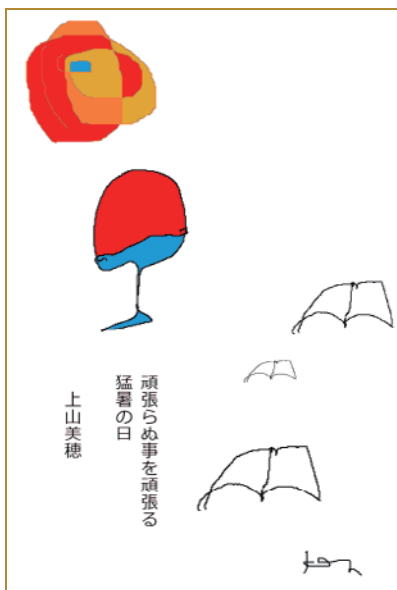


■今月の特選句

2025年10月



頑張らぬ事を頑張る猛暑の日

上山美穂

「頑張れぬ事を頑張る」とするなら分かりやすいが、「頑張らぬ事」として、おやと思わせる。つまり、この句は「頑張りません」の句なのである。



詐欺電話受話器置く手が西瓜切る

朧 潤

詐欺の電話は巧妙で、脅迫、脅しを使って恐怖心を煽ってくる。しかし、作者は全く動揺することもなく、応答した直後に平常心で西瓜を切る。



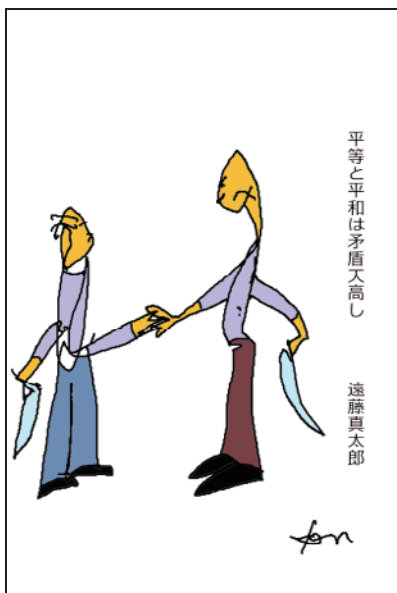
夏蝶の木蔭より出て消えしまま

柄川武子

蝶が一匹、木の蔭から出て戻って来なかった。ただそれだけの事だが、不思議な余韻がある。小さな命の生から死へのゆるやかな軌跡が見える。

■今月の特選句

2025年10月



平等と平和は矛盾天高し

遠藤真太郎

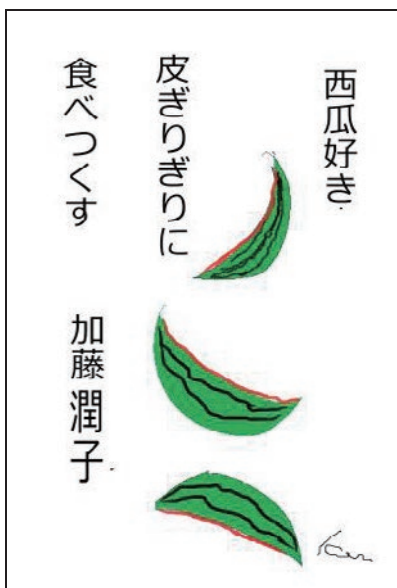
世界は平等を建前としているが、現実決してそうではない。いつの時代にも争いが絶えない。宇宙や自然界には矛盾がなく調和しかないのに。



残暑見舞い入道雲にも出そうかな

鈴木和枝

「入道雲」のもくもくがお好きなのですね。入道雲に手紙を書きたいと言った人は、これまで誰もいない。鰯雲だと何十枚も書かないといけないね。



西瓜好き皮ぎりぎりに食べつくす

加藤潤子

分かるなあ。「赤いところだけにしなさい」と言われても、「まだまだいける」と頑張る気持ち。メロンもしかり、アイスクリームのふたもしかり。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

乳母車覗けば犬の昼寝とは ・・・その横顔の飼ひ主に似て	久松久子
秋澄むやゴジラ出さうな都庁街 ・・・まず新宿に表敬訪問	西野周次
いびきとため息熟年夫婦の長き夜 ・・・言葉は要らぬ阿吽の呼吸	稲葉純子
ペデュキアをさっぱり剥がし夏送る ・・・息吹き返す素の足の爪	鈴鹿洋子
手土産で寝た子を起こす秋の夜 ・・・子どもの喜ぶ顔の見たさよ	池嶋久春
山の日 山へ海の日 海へ ・・・七月七日は「川の日」ですね	沖枇杷夫
新走り座つて飲もう逃げぬから ・・・逸る気持ちはよく分かります	奥野元喜
秋茜群れない君を生きてみよ ・・・トンボに無理を言うてはいかん	井口夏子
人恋し人語恋しと虎落笛 ・・・気付いて欲しくて隙あらば吹き	青木輝子
蚯蚓鳴く伸びて縮んでまた伸びて ・・・全身使ひて一心に鳴く	伊藤浩睦
短夜のいくつ分だろ夜長とは ・・・割り算すればすぐに分かるよ	日根野聖子
肉食系女子の一団花野から ・・・草食系の男子は恐れる	長井多可志
葛餅の四角三角ぶつかれり ・・・それはおそらく互角の戦い	工藤泰子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

老体の狼孤独月に吠え

天高し行きはよいよい競馬場

見つからず玉蜀黍にお齒黒は

泉湧くポコリポコリと音たてて

都合よく忘れる妻や麦の秋

秋晴れや老化を走る加齢衆

いつか又会へる気がして盆の月

会ひたしと七夕短冊揺れてをり

黄昏に早や酔ひつぶれ花芙蓉

地球燃ゆ自業自得の暑さ哉

コスプレの夏も涼しやタトゥ着て

暮れてなお生涯一芸みんみん蟬

仇敵の如くに秋の蚊を叩く

盆波や浜の真砂の減り行く日

鰯雲そんなに群れて何処へ行く

白さるすべり散歩の私はすべり症

この暑さ停電ばかり気になりて

扇風機残業手当と埃取る

夏瘦やダイエットには程遠し

スーパーの食品売場に涼みをり

充電の切れかけた音今朝の蟬

露天湯にふうと浸かれば秋の声

大花野雲に乗れると思った日

私にですか敬老日を祝う品

孫帰省リビングにぎはふ遅くまで

草むらの小虫は鳴かず秋遠し

夏の海思ひ出キラキラ梅津寺

避暑と言ひ籠る自室のあれやこれ

青木輝子

青木輝子

井口夏子

井口夏子

池嶋久春

池嶋久春

池田奈美子

池田奈美子

池田奈美子

池田亮二

池田亮二

池田亮二

伊藤浩睦

伊藤浩睦

稲葉純子

稲葉純子

井野ひろみ

井野ひろみ

井野ひろみ

上山美穂

上山美穂

卯之町空

卯之町空

卯之町空

梅野光子

梅野光子

梅野光子

柄川武子

真夜の馬車魔法解ければ南京に

秋風もB型ありと論客の女史

添水の音思い出させる「マイブルーヘブン」

恋の句を詠みたし晩夏の縄のれん

出家するほどの恋なし赤とんぼ

大月で大きな月を愛でにけり

夜長とも闘ふ球児甲子園

夏の宵もう見かけないお化け番組

外人はグリーン車で行く夏の旅

屋根越しに大花火見る不精者

蝸がもうお帰りと面河溪

忍び難きを忍んで耐えた終戦日

天の川星より多い恩義受け

キャッチャーは多忙なポジション汗拭かず

神無月八百万の大バスター

木の葉髪苦心の末の丁髷(ちょんまげ)か

読書する時間ばかりの酷暑なり

我が友はビールばかりの酷暑なり

小判草小さな鉢にひしめけり

秋団扇ハンディファンの多勢にて

野球部の日焼けの顔の歯が白い

処暑の日や孫と曾孫の話など

「目よ治れ」小豆を投げるおまじない

水温まぬ良い陽気になりました

心頭を滅却すれば熱中症

蟬時雨ゲリラ豪雨に水差され

熱帯夜ごと餃子を包む指

空調服夏の日差しにダイブせよ

新涼の鉢に小さな芽を見つけ

暴走のバイク熱帯夜を熱くする

柄川武子

遠藤真太郎

遠藤真太郎

沖枇杷夫

沖枇杷夫

奥野元喜

奥野元喜

朧 潤

朧 潤

加藤潤子

加藤潤子

門屋 定

門屋 定

門屋 定

北熊紀生

北熊紀生

木村 浩

木村 浩

工藤泰子

工藤泰子

黒田恵美子

黒田恵美子

黒田恵美子

不喰芋

不喰芋

不喰芋

桑田愛子

桑田愛子

桑田愛子

桜井美千

見向きもされず立ち枯れのひまわりは
右端は薄く途切れて秋の虹
[糸蜻蛉身は細けれど不退転](#)
五年前新米だった古古古古古
行水や一節唸る雲右衛門
ゴキブリを叩き損ねて入れ歯噛む
向き直す妻の臍には栗ごはん
[ガサ入れや勤労感謝日の早出](#)
電照菊が煌々灯るウォーキング
細長い皿に秋刀魚の塩焼は
[大金鶏菊YOUは何しに日本へ](#)
八月や未だに消えぬ原子の火
[放課後の一人ぼっちや赤とんぼ](#)
[コロコロ忘れコロコロと昔が出てくる](#)
盆が来る床屋の椅子は馴染み顔
[対岸の花火がつまみバドワイザー](#)
風鈴は昭和の子どもの子守唄
プチトマト今はまってるカルパッチョ
鈴虫の合唱を聞く夕べかな
[露の世を露の如くに生きてみし](#)
シャリシャリと稲穂の乾く音のして
[先達は石頭なり地藏盆](#)
補聴器を付けてにこにこ菊日和
学校を遠く感じる休暇明
八月の子等はイオンを駆け回る
降り注ぐ天の怒りや秋の雷
[鳴き止めば家族しんみり法師蟬](#)
老人のまめに辞書引く秋はじめ
人生の儚さたるや星流る

桜井美千
桜井美千
[敷島鐵嶺](#)
敷島鐵嶺
敷島鐵嶺
壽命秀次
壽命秀次
[壽命秀次](#)
上甲 彰
上甲 彰
[上甲 彰](#)
鈴鹿洋子
[鈴鹿洋子](#)
[鈴木和枝](#)
鈴木和枝
[曾根ともみ](#)
曾根ともみ
曾根ともみ
高須賀溪山
[高須賀溪山](#)
高須賀溪山
[高田敏男](#)
高田敏男
高田敏男
田代輔八
田代輔八
[田代輔八](#)
田中 勇
田中 勇

あの方の才は線香花火なり
死に水はワインがいいな天の川
あら本当鱗のやうなうろこ雲
スーパーの商品となり鈴虫も
見せられぬ浮き輪の下のもがく足
一日は遅延精算盆休み
猛残暑汗で見えない万歩計
法師蟬都はるみののだ自慢
秋夕焼のひとり舞台や空と海
その響きロシア語かしら馬鈴薯
現世にもう飽き飽きと秋茄子
鬼灯を吹きてもつぶれ恋の夢
濁り酒寡黙な友に気をつかひ
吊輪持つ少女の長き腕涼し
言ひ聞かすやうにも鳴いて時鳥
蓮の葉に蓮のはなびら一つ乗り
秋空へ砲丸投げの腕伸ぶ
秋風やこれがさうかと思ひつつ
十月になっても有るか猛暑の日
枝豆のひとさやの四個食べ比べ
敬老日肩たたき券を乱用す
心臓にあげる勤労感謝の日
人生のピークは今日か敬老日
肝試しキミには俺が憑いている
秋来たりシェークスピアを観に行かな
雨上がり俺の出番と赤トンボ
水遊びぜつぺき頭の父と孫
墓参りわが庭の花持つてゆく
どかと置く娘の荷物夏休み
新豆腐無いようである主張かな

田中 勇
谷本 宴
谷本 宴
谷本 宴
月城花風
月城花風
月城花風
土屋泰山
土屋泰山
土屋泰山
百目鬼強
百目鬼強
百目鬼強
尚山和桜
尚山和桜
尚山和桜
長井多可志
長井多可志
長井知則
長井知則
長井知則
永井流運
永井流運
永井流運
西野周次
西野周次
能登久美子
能登久美子
能登久美子
花岡直樹

どんぐりを熊の餌場にどっさと
収まらぬ残暑ビアガーデン延長戦
箒草枯れても人の役に立ち
値上がりのスイカ手の出ず撫でるだけ
台風来ややこしい親戚来るとく
じいじもばあばも元気はつらつ敬老日
エアコンが秋を忘れてウナリ声
水不足秋雨前線何処行つた
まだ夏・秋を忘れたカレンダー
生身魂酒も煙草もパチンコも
涼月や保護されて来し犬洗ふ
今朝秋の掌に乗せてみる日の光
カンナ燃ゆ空にはブルーインパルス
枕辺に手帳と歳時記夏の風邪
傘寿とで一瞬のこと流れ星
暑さ君そろそろ帰ってくれないか
大花火幕間に急いで夜空拭く
竜田姫が出番待ってる空の奥
店先で視線恥ぢらふ今年米
路地残暑息切れさうな室外機
大川にヒップポップの鯯ダンス
芋虫のどつちが頭裏返す
小鳥来る「おにのパンツ」の手遊びに
長き夜やぢぢの隣のババを引く
「ナレ死」でもかまわぬと言ふ生御魂
新米や新種と紛ふカルローズ
道の駅秋を丸ごと贖(あがな)へり
戦争の昭和も遠くなりけり
夏行くや本土決戦さけらるる
梅雨晴間たちまち気温上がりけり
万博の大屋根日傘に回さるる

花岡直樹
花岡直樹
久松久子
久松久子
日根野聖子
日根野聖子
細川岩男
細川岩男
細川岩男
ほりもとちか
ほりもとちか
ほりもとちか
三木雅子
三木雅子
三木雅子
南とんぼ
南とんぼ
南とんぼ
峰崎成規
峰崎成規
峰崎成規
棕本望生
棕本望生
棕本望生
村越 縁
村越 縁
村越 縁
村松道夫
村松道夫
村松道夫
森岡香代子

唐辛子喉の火種は癖になる

秋愁ふ筋肉緩む仁王さま

無花果と書く一字一句を間違はず

ほとんどのが消息不明流れ星

手と足がばらばらでこそ盆踊

大谷がアーチをかける子規忌かな

爽やかな人にもじもじする私

舞茸の天ぶら舞の途中かな

香水はそそのかすもの朝帰り

熱帯夜海の底まで干からびる

夏枯れのムード十分真鯛釣

シャワシャワワ蟬の目覚まし時計かな

ありがたや炊きたて新米にお漬物

津島神社や赤い橋と白い月

切り売りの西瓜透けをり値の張りて

拌むのみ秋の味覚の高値には

空蟬や耳に鳴き声残りある

野分来るバリバリバリと雨戸打ち

暑気払ひ同時に予防熱中症

測られしやうにそろうてぶどう粒

御苦勞様とつぶやき仕舞ふ扇風機

稲稔る米騒動を笑ひつつ

無花果の汁のかゆさに口まがる

白服を染めてしまひし黒葡萄

太陽に負けたらいかんなカンナ立つ

赤蜻蛉群れて視界を遮らる

炎帝とて采配振れぬ四十度

冷房に命を預け愚痴止まず

手を振りて駆けて来し道夏の雲

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

八塚一青

八塚一青

八塚一青

柳村光寛

柳村光寛

柳村光寛

山岡純子

山岡純子

山岡純子

山下正純

山下正純

山下正純

横山洋子

横山洋子

横山洋子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉川正紀子

渡部美香

渡部美香

渡部美香

和田のり子

和田のり子

和田のり子